

ダンスカンパニー生成に関する一考 ～ダンスカンパニー〈プロジェクト大山〉を事例に～

Study on generation of dance company

～In case the dance company"project ohyama"～

三輪 亜希子、田代 順
MIWA Akiko and TASHIRO Jun

[要約]

筆者の所属するダンスカンパニー〈プロジェクト大山〉は大学という教育機関から発足した。卒業から様々なターニングポイントを経過し、発足10年目を迎える現在も活動の幅を広げながら日本のダンスシーンにおける地位を確立し始めている。〈プロジェクト大山〉はコンテンポラリーダンスのカンパニーである。コンテンポラリーダンスが日本に根付いてから30年あまりの時間が経過した。同時代の感性を取り入れ、斬新で新しい演出に富んだ芸術として瞬く間に90年代のダンスシーンを彩ったコンテンポラリーダンスであるが、現在は、手法や振付がある程度確立され、新しさが生まれにくいと認識されるような過渡期にもさしかかっているといえる。また、日本ではダンスが職業化していないという事情から、日本における多くのダンスカンパニーは契約や組織規定のない緩やかな結束で成立している傾向がある。こうしたことを背景に、この論文では、日本のダンスカンパニーの生成に関してメンバーの言葉を読み解くことで考察していく。今回を初考とし、さらなる考察の展開を図る計画である。

キーワード：

コンテンポラリーダンス、カンパニー、生成

[Summary]

This study is research on a dance company "Project Ohyama" which I belong to. The choreographers and dancers in that company have graduated from the same university. I have been participating in this company from its starting. We have experienced many turning points since we graduated, and now we are about to get a certain position in Japanese dance scene. Our dance company offers contemporary dance. Contemporary dance began in the 1980's. It overwhelmed Japanese dance scene of the 1990's by taking sensibility to the times, and putting new and striking production.

But now, Contemporary dance is in a transition period. That is because of that it has been facing to difficulties to find fresh breath in its works, and also many of

dancers are struggling to make their living in Japan. Most of Japanese dance companies are moderate unities and have tendency to be organized without contract or provisions.

Therefore I research into the case of the dance company in Japan, and consider its history (elements) through interview to the dancers..

This paper is a first step and so I'm planning the next detailed development.

Keywords:

contemporary dance, company, generation

1. はじめに

ダンスカンパニーとはどのように形成されていくのか。そもそもカンパニーというのは会社、組織のことを指し、ダンス以外にも企業や集合体の呼び名として使用されるケースが多い。組織の呼び名としては他にグループやユニット、サークル、団などもあるため、集団名にカンパニーを利用することがダンスにとって概念的規定をもつわけでは決していないが、カンパニーを多用する傾向がある。また、本論はこの呼び名の由来について考察を深めるものではない。組織が形作られていく過程について組織の内部者から聞き取った言葉への読み解きを通して考察することを目的としている。対象はコンテンポラリーダンスカンパニーとする。研究方法は、インタビューデータからの考察を主とし、話の脱線を許す半構造化インタビューを採用した。インタビュアーを2名置き、あらかじめ用意された質問を1名が行ったのちに追質問として更に内容の掘り下げをもう1名のインタビュアーが行うという体制をとった。

語彙規定

コレオグラファー：作家、振付家

2. コンテンポラリーダンスの変遷

コンテンポラリーダンスの歴史的な位置づけとしては1980年代頃にヨーロッパを中心に発祥したとされる。型通りでない創作的なダンスとして、現在世界各地に広がり、演出や上演の場においても進化を続ける舞踊のことを指す。動きのジャンルや発表形態に固定概念を持たず、バレエや民族舞踊、ヒップホップ、サーカスといった多数の身体表現とコラージュされながら進化した。それを支えるのは作家、振付家、演出家の存在であり、個々の哲学や舞踊思想が大いに反映された舞踊とも言える。振付家の思想が大きく反映される作風と共に、創作の過程や上演の規模も多様であり、カンパニーの形態が振付家によって大きく異なる点もコンテンポラリーダンスの特徴の一つである。

3. コンテンポラリーダンスにおけるダンスカンパニー

コンテンポラリーダンスとは、「同時代のダンス」や「既存のジャンルに回収されない新しい舞踊の総称」¹⁾とされ、同時代性に重きをおく傾向があり、社会的な影響が演出や上演の場に大きく反映する。その組織のあり方も様々で、ダンスカンパニーの形態や規約、活動状況はその集団が誰を中心としているか、どのような背景を持っているのか、また資金や環境との関係によって多種多様な形態がある。例えば欧米のダンスカンパニーは、国営化や民営化されたものが多数ある。そこではシステムティックにカンパニーが構成されており、ダンサーは契約を結んで年単位でスケジュールされた公演及びリハーサル活動を行う。一方日本においては、稽古場やスタジオといったダンスを訓練する環境は多数あるが、国営化、民営化されるような文化の一部としてのダンス組織は極めて少ない。多くのダンサーは、リハーサルや公演期間外の時間にダンスインストラクターやダンス以外の職業に就きながら生計を立て、舞台活動を並行して実施する手段を取っている。また、組織作りとしても日本独自の進化がみられる。芸術を主軸とする教育期間の延長線上や部活というシステムで生まれたチームなどが、そのまま文化事業を担うようなダンスカンパニーとして活動を続けているケースがある。恐らく彼らは、組織の特徴や活動の方向性といったビジョンが先にありそこに対して形成されたということではなく、学内の発表や課題の経過を踏みながら自然発生的にチームのあり方が形づくられていったのではないだろうか。ここで、日本のコンテンポラリーダンスのカンパニーを幾つか挙げる。

コンドルズ

1996年発足、近藤良平が率いる男性ダンスカンパニー。トレードマークは学生服であり、初演作品『太陽にくちづけ』以来変わらず20年間この衣装である。コントや影絵、人形劇、映像などを多彩に盛り込んだ演出が特徴で、渋谷公会堂公演にてチケットを完売させるなど日本のコンテンポラリーダンス界では異例の観客動員数を記録している。初代メンバーは大学別の創作コンクール「All Japan Dance Festival in kobe」の男性楽屋で知り合ったという。2005年第4回朝日舞台芸術賞「寺山修司賞」受賞。NHK総合「サラリーマンNEO」内「テレビサラリーマン体操」や、NHK連続テレビ小説「てっぺん」オープニングの振演出演、NHK紅白歌合戦出場も果たしている。

ダムタイプ

1984年に京都市立芸術大学の学生を中心に作られたアーティスト集団。古橋梯二作品『pH』が大きなブレイクのきっかけとなる。断片的な映像やノイズを駆使したスタイリッシュな演出が特徴的である。建築、美術、デザイン、音楽、ダンスなど異なる表現手段を持つメンバーが参加し、しばし「マルチメディア・アート・パフォーマンス・グループ」と呼ばれる。組織構成も特徴的で、固定メンバーを持たずリーダーを擁立しない共同制作の方法を取る。

ニブロール

矢内原美邦を中心に、映像作家、音楽家、美術作家が集うパフォーマンス・アート・カンパニー。1997年発足。ダンサーは作品ごとに大きく入れ替わる。主宰の矢内原は高校

時代から全国高校ダンスコンクールのNHK賞受賞等、数多くの賞を受賞している。大学で舞踊学を専攻した後、ブラジル留学、映像学校に進学の後、カンパニーを設立。2012年に作品『前向き！タイモン』で第56回岸田國土戯曲賞受賞。横浜文化賞文化・芸術奨励賞受賞。美術館やギャラリーでのパフォーマンス、ビジュアル作品の発表など身体表現の幅を広げている。

珍しいキノコ舞踊団

1990年演出振付の伊藤千枝を中心に、日本大学芸術学部のメンバーでカンパニーを結成する。演劇界での注目が先で、1992年小劇場の登竜門であるガーディアン・ガーディアン演劇フェスティバルに出場している。日常の「普通さを表現する」というコンセプトのもと、暖かみの溢れる作品を創り続け「ポップでキュートな」と評される。代表作『フリル(ミニ)』は、日本舞踊批評家協会新人賞を受賞し、アビニョンほか海外数カ所で上演される。

4. プロジェクト大山の歩み

2006年に古家優里を中心に、お茶の水女子大学舞踊コース卒業生によって結成する。在学中より、全国創作舞踊コンクール等に出場しながら、作家と出演者としてのお互いの研鑽を積む。卒業後、共同創作への意欲が沸いた同級生によってチームが結成され、コンクールやチケットノルマのある公演へ作品を出し続ける。結成3年後、2009年に全国巡回型の公演「踊りに行くぜ！vol.8」に選出される。同企画で最終的にファイナリストに選出され東京・大阪公演を果たす。同年、フランスの都市ニームで行なわれた「L'EXPERIENCE JAPONAISE」へ招聘され初の海外進出を果たす。この頃から、プロジェクト大山の作風やキャラクターが認知され始める。メンバー内でカンパニーという意識と責務が大きく芽生えたのもこの頃である。2010年には、日本で最大規模のコンテンポラリーダンスコンクールである「TOYOTAコレオグラフィアワード2010」にて次代を担う振付家賞を主宰の古家が受賞。受賞の理由は、振付力と可能性との評価であったが、結成当初と比較するとカンパニーメンバーが作品への信念が高まった時期でもあった。大きなコンクールに出場できる機会を得たことが一因となり、学生同士の関係性から共同創作の出来る振付家とダンサーという関係性へと変化した頃であった。受賞後、2011年には高知・金沢での受賞者公演、長塚圭史演出・シスカンパニー制作『ガラスの動物園』へカンパニーごと出演オファーを受け、更にNHKのEテレ「みいつけた！」番組内コーナー「オフロスキー」への振付・出演等が続く。結成当初から、全員が教員やOLの仕事をしながらカンパニーダンサーとして所属している。これも一つカンパニーの特徴であり、今では教育とダンスや教育とカンパニー活動の結びつきを考えるもの、普及や広告とカンパニー活動の結びつきを考えるものがメンバーにいる。

5. プロジェクト大山の活動歴

- ・2007年JCDN『踊りに行くぜ！！vol.8』に参加。
- ・2008年10月 大野一雄フェスティバル参加（以来、毎年参加する）。
- ・2009年2月 横浜ダンスコレクションR本選出場、審査員賞 受賞

- ・2009年3月 南仏ニームでのビエンナーレL'EXPERIENCE JAPONAISEに参加。
- ・2009年 中田ヤスタカプロデュース MEGの『SKIN』にPV出演、ライブにも出演。
- ・2010年7月 トヨタコレオグラフィアワードにて 主宰古家が「次代を担う振付家賞」受賞。
- ・2011年 トヨタコレオグラフィアワード受賞者公演として、東京・高知・金沢で『キャッチ・マイ・ビーム』を上演。
- ・2012年2月 横浜ダンスコレクション受賞者公演に参加。
- ・2012年3月 T・ウィリアムズ原作/長塚圭史演出『ガラスの動物園』 振付及びダンス出演で参加
- ・2012年6月 単独公演『みんな しってる』@スパイラルホール
- ・2012年12月 単独公演『ホルスタイン』@あうるすぽっと
- ・2013年2月 TPAM2013 トヨタコレオグラフィアワード受賞者としてショーイング?
- ・2013年3月 六本木アートナイト2013 に出演
- ・2013年7月 単独公演「ファンタジー」@シアターラム(三軒茶屋)
- ・2014年4月 六本木アートナイト2014 に出演
- ・2014年5月 福岡演劇フェスティバル「ご開帳」@イムズホール
- ・2014年3月 セッションハウス D-ZONE リレー単独公演「オオヤマニアック」@セッションハウス
- ・2015年2月 ダンスアーカイブプロジェクト2015「をどるばか」@BankART Studio NYK

6. インタビュー調査 (ダンサー A)

質問1 振付家の下で踊ろうとなった経緯	<p>大学の同級生だったので、大学の授業内で一緒に作品をつくる機会があった。それぞれが振付家になったり、作品に対して意見をすることがあって、その古家さんが考えていることや動きの出し方が面白いと思っていた。</p> <p>学生のときに一緒にやっていた。良く知った仲というのがすごくあると思います。</p> <p>きっかけというのは学校での授業の中とか部活の延長線上にいまがあるところだと思っています。</p>
質問2 ご自身がカンパニーに入団したと思う時期を想像して、それまで抱いていたコレオグラファーへの印象の違いはありますか？	<p>学生で、お互いが未熟なときから知っていて、それに比べるとやっぱり悩んでいるポイントはこの辺かなとかがお互い分かるようになってきたので、向こうも少しずつ発信してくれるようになったとか。</p> <p>作品の作り方をカンパニーとしてどうやっていくかというのはやりながら成長していつているのかなとは思いますが。</p> <p>動き。学生のときにいろんなダンスを観たり、他の振付家のところで踊ったことが他のメンバーに比べたら多くはないですが少しあって</p> <p>動き。学生のときにいろんなダンスを観たり、他の振付家のところで踊ったことが他のメンバーに比べたら多くはないですが少しあって。そこでやっぱり古家さんの身体から出てくる動きというのはちょっと独特な、他の振付家にはないものがあるというのは続けていく中でより確信が出来るようになったところ。</p>
質問3 ダンサーA本人がカンパニーダンサーだと思った時期はありますか？	<p>一つは学校を卒業してそれでも振付家を中心としたメンバーで一緒にやっていると、学校の部活とか義務という環境的な要因はなくなったにも関わらず一緒に踊ろうと決めた時点からそれはカンパニーなのかなと私は思います。</p>
質問4 入団したときから継続的にカンパニーに在籍することを後押しした理由はありますか？	<p>この人となら面白いことが出来そうだなという、振付家自身の魅力もありますし。</p> <p>自分がダンサーとしてすごいテクニックがある訳でもないし、それよりも身体の特徴とか振付家と似ているところがあるかもしれないとか、このメンバーの中ではこういうポジションに私がいけるかなとなんとなくイメージできるので。</p> <p>居心地がいいというのはあれですけど、他の振付家とかイベントでそーいっつていくのも面白いと思ったんですけど、一緒にやっていきたいなと素直に思えたところなんです。</p>
質問5 コレオグラファー古家のクリエーションの中で、特に興味深かったことや思い出に残っていることはありますか？	<p>作品になった時には発想が、プロデューサー曰く「出だしのシーンはいつもすごいいいね」というのもあって、この作品でこういうショーをやりたいとパッと彼女の中で出てくる画が結果的に大体面白いことになっている。話を聞いたときは「いや～それ出来るかな～」というのがいっぱいあるのですが、なんとかそれを形にしようという心意気と、結果面白いものが出来ているのがそれは興味深い。</p> <p>メンバーの努力と振付家の思いの結晶</p> <p>コケティッシュというか可愛らしいとか女性の身体の良さを無理なく生かしているし、子どもが真似したくなるってすごいなと思って、キャッチーな動きを出せる人だなと思っています。</p>

質問6
具体的に印象に残っているエピソードはありますか？リハの中でも、二人のやり取りの中でも構いません。 色々ありすぎて、 やばいと思った意味で印象に残っているのは、「ホルスタイン」という作品の時に、シーンの断片は結構前から出来ていたのですが作品としてどう通そうというのがなかなか決まらなくて、このシーン私たち何の衣装を着てるんだらうねというのが全然決まっていなくて、今日リハ、もう舞台上上がるけど大丈夫というのがあって、パッと印象をみんなと共有できるシーンと、振りをつなぐときにあれ！こっつてどうだっけ？というのがあったままでも気にしないという言い方は変ですが、それはそれとして1時間の作品を本番までには持って行くという。 あまりそういう、学生のときはありがちだったので、他の振付家ってそこまでそれが決まっていなくてあるのかなと、気になるというかそういう創り方なんだなと思いました。 動きは日常の動作とかだれかメンバーが遊びでやったことがそのまま振付として採用されちゃったりする。その動きの見つけ方というのが、みんなでたまたま遊んでてその遊びがそのままでのシーンになったりとか、印象的なリハーサルのシーンだったかな。
質問7
「ホルスタイン」の作品の時のエピソードをお聞きしたいのですが、その境地であなた自身はどういう立場にいたのですか？メンバーからこのままでよいのかと振付家へ尋ねるなどはあった？ たぶん言っただけというか、決まっていなくてメンバーで思っていたとは思いますが。 でも、やっぱり振付家である古家さんがこのシーンにしたいというイメージを一番持っているのを「待つ」じゃないですけど、それを大事にしたいなというのを私は割と思っていて、迷っているのかなんなのか、迷っているじゃないけど、ここまで出てきているけど形になっていないだけかなとか。その後者かなその時は思っていたのですが、結果出てこなかったからあれになったねという感じだったりして。 あまり急かして無理に決めさせるといってのやっつた方がいい時とやらない方がいい時とあるのかなと。 自分が何かものを創る時でも、今いろいろアドバイスもらうのは嬉しいけど、ちょっとそれ受けられないのよねという状態もあるのかな、とそれを感じて。 必要なら言うし、待った方がいいなら待とうかなと思うしみたいなの。
質問8
質問7の回答はメンバーと振付家との心理戦ですよ、それを考えながら活動し始めたのはいつ頃かなと思いますか。 割と学生の時からみんなで創るのを授業より部活よりやっていて、この人がやりたいのかなとか、やるって言ってあげた方がいいのかなとかは学生の時の方が思っていたかもしれない。 今は古家優里が主宰のプロジェクト大山というカンパニーで活動する場合は、最終的な決定権という古家の思いと違うものが出来上がらないようにというのには逆に意識しようかなと。 学生の時は学生の時のので、コンクールだったら結果をどうするか別の観点も入ってくると思うんですけど。 カンパニーの作品を創る時とか。イベントに出るときはもっと気楽に、時間ないから決めちゃおうというの言うかもしれないですけど。
質問9
大山のスタイルについて、女性のみカンパニーに対して よく女性のみだと、いろいろ感情的になってとか、派閥ができてというイメージを持たれる方もいるかもしれませんが、それが全くなく、仲良しよとまた違うのですが、女性だからこう！というのをあまり意識せずに居られるのはいいかなと、良いところかなと。 作品の特徴がたまたま今まで女性のみで成り立つものだったので、必要なら男性ダンサーが入ってくるだろうとは思っています。
質問10
作品の特徴は、女性のみで成立しているものだとダンサー自身も感じているということだと思いますが、もう少し具体的に教えてください。 群舞の創り方でみんなが同じコスチュームで頭もかぶっちゃって、パッと見誰が誰かわからないような格好で、色んなところから出てきたり、場所を変えては同じ動きをしてみたり。魚の群れの動きを見ているような。個性はよくわからないけれど、群れとして、昨日水族館に行ったので、「いわしフラッシュ」というシーンあったなって。そういうことが出来るのも女性、背が小さいとか大きいとか体格差はあれど、同じ量の人みたいなのが出来るのは性別がないというのも特徴かなと。男性メンバーが入ってもきくとあの青いレオタード着るんだらうと。 女性だからというくさくさ、正確に首をかしげるとか、女性だけの世界をうまく使ったシーンもあるのですが、男女だとそれだけでストーリーが出来てしまうので、その男女のストーリーを今やっつけないんじゃないかなと思います。
質問11
衣装と音楽に非常に興味をもった観客も多いと思いますが、衣装と音への印象は 衣装も音も、照明もそうなのですが、振付家のやりたいことにうまく力を貸してくれる。それぞれの人の作品でちゃんと古家の作品を生かす、お互いに生かすみたいなのが出来ている関係なんだと、それは本当にすごいことでもみんなも同年代でチームワークの作品が出来るとは、観客として見てもすごいことだと思う。衣装も素敵だし、音楽もオリジナルでもらうときもあれも加工してもらったときも色々やり取りしてちゃんと作ってもらっています。 ダンサーもすぐそれに助けられている。この衣装でこのシーンをやるんだよね、というようなイメージが連鎖していく。 古家の作品に限らずですが、「ガラスの動物園」という他の演出家の作品でダンサーとして出た時も、なんでこのシーンでこの動きかなと稽古着でやっていたときからなかったものが衣装を着て舞台上上がって、そうだよなとじっくりみるみたいな。私がダンサーとして全体的に見えてきてやっつくりくるというのを感じがちなのかもしれないですが、古家の作品では、衣装これだよ、音楽これだね、よしけるというのをすごく感じる。自信が出るというか、これで間違っていないのを感じます。
質問12
大山で踊ることとその他の活動と比べ、ダンサーとしての取組みに違いはありますか 最近古家のところばかりだったので、ただ、ホーム感が強くなってきているので作品もそうだしそれ以外のところでも古家のやりたいことを支えたいと思っている。他の振付家のところだと、自分が作品にどうかかわるかとか、ダンサーとしてちゃんと期待に応えなきゃとかそういう思いの方が強くなるのですが。 古家優里の作品でとなると、自分とはあれ作品はこうあってほしいとか、自分じゃできないところをこのダンサーにこう動いて欲しいとか、古家はこうやるべきでしょという視点をもって参加していると今振り返ると思います。
質問13
立ち上げが2006年と定義すると約8年間活動していると思いますが、ダンサーA自身の大山ダンサーとしてのターニングポイントはどこですか。 ダンサーとしてはあまりないのですが、プロジェクト大山としては割とトントンとTOYOTAコレオグラフィーアワードを取るまでは来ているという印象があってそれは本当に色々機会に恵まれていると思うし、その時自分以外含めて一緒にやっつていくダンサーがいることも、さっき言ったスタッフの力も揃ったというの。 TOYOTAって2010年？2008年って落ちた。2008年から2010年にかけて継続してレパルアップが出来ているんだらうと、それを更に認めてもらえる場があった。お遊びじゃなくてちゃんと次代を担わなくてはという思いもみんな強くなったんじゃないかな。 賞を取るのなんやかんやで大きな話。話を通しやすくなったという事も含め。 「踊りに行くぜ！！」という企画もあったのですが、地方でもいっしょに踊れるねとかこの作品作ったから今度はこういう作品作ろうねとか、次に繋がるステップになっていたのが良かったと。
質問14
今後どうなっていくかと思うことをダンサーとして教えてください。 個人的な思いなんですけど、古家さんの創る動きってキャッチーだし、古家さんほいねという、他のプロジェクト大山のダンサーが出てくる仕事とかテレビの仕事があっても、それを生かせるもらえるのかなと思う。作品を創ること以外でもそういう場でどんどん古家さんの動きってこんなんだねっていうのを広めていって欲しいなとダンサーとしてでなくて古家さんへの思いなのですが、というか、それが出来るものじゃないかなと思ってる。 大山がダンスカンパニーとして公演をやっていくのも、継続していくことが力になるんじゃないかなと思う。「次いつやるの」って聞かれるのは本当に有難いことだなと。また観たいとか、観てくれて嬉しいと思ってくれる人がいるというのはカンパニーとして続けていく上では、ファンの声ですべてじゃないですけど、そこは続けて行きたいなと思います。
質問15(追質問)
振付家がカリスマ的にほんといいて、それをみんなが囲んでいるというカンパニーと受け止めていいのですか。 私は、そうであった方がいいとは思っています。言葉を選ばなければ便利というかな。 でも作品を創るとなると、それぞれのダンサーが得意な動きがあったりとかみんなから出てくるイメージもあったりするので、作品を創るという意味ではそれだけではないと思っています。 カンパニーとしてどうやっていきたいという方針を考えると、古家の意見を見れば進まない方がいいかと思ってる。ちゃんと古家がどう思っているかを引き出してメンバーもあげられたらと思いつつ。

質問16(追質問)	カンパニーに入った年代順とかヒエラルキーはあるのですか。
	大学の卒業生でほぼ構成されているので、どうしても先輩後輩というのは出来ませ ただ、コミュニケーションの取り方は人によって違う、割とみんな自由なので、言いたいことは言うし言わないことは言わないし、やりたいことはやってやりたくないことはやりたくないしというか。自由だね。
質問17(追質問)	古家さんがリーダーシップを取って、基本的には古家さんがリーダーとしているの。それともサブの人がいるとかはあるのですか。
	時と場合によっては。こういう場面ではこの人がサポートしてとか、なんとなくメンバー内で役割分担がそれぞれあるので。適材適所ですね。
質問18(追質問)	意見の違っていてあまりないのですか。実はこういう考えがあるのだが、という意見は発生してこない？
	いったんやってみて、やっぱり納得いかないってなったらそうなんだね、という。ダンスで一回やってみると結構大変で、思うように形にするのが時間がかかったりするの。でも基本、もしメンバーから何か出れば一回検討してみる。みたいに、みんなでそのパターンでやってみるというのがあるかも。今あまり具体的に思いつかないですが。
質問19(追質問)	しぶしぶ従って、納得いかないんだけどそれをやるっていうことはある？それは少ないカンパニーなのかな。
	多少はあるかもしれない。このシーンはなんだろうっていう謎って思う瞬間もありますけど、どうしても気持ち悪い場合古家さんへメンバーから聞く場合もあります。ちょっと気持ち悪いけどすごいやだよないからいいかとダンサー内で折り合いをつけているところもあるんじゃないかな。
質問20(追質問)	基本的に対立というのは生まれませんか？
	あるときもありますけど、公演日がいつと決まっているので、どっかかに倒さないとねみたいな。
質問21(追質問)	古家さんの身体性って具体的にどんなもの？フェミニンな動きとかに尽きるのかな。
	動物とか虫とか、鳥とかが好きで、そういうところからきつとヒントを得たんだろうな。とか、何かの生物っぽいとか例えとしてもよく言葉として使っている。
質問22(追質問)	人間離れした動きで格好いいとかではないですか。
	そうですね、格好良すぎるのを嫌うって言うほどじゃないですけど。ちょっと決めすぎないというか、あえて中途半端で終わらせるとか。魅せ方としての独特なところが出てきているのかもしれない。
質問23(追質問)	一言でプロジェクト大山の面白さをいうとしたら何ですか。一番の押し。
	綺麗なヘンテコさ すごいテクニックをばりばり見せつける訳ではないですけど、長くダンスをやっているメンバーが多いということもあって、やっている人が見れば複雑なことをしているなということを感じているので、フォルムとして雑なものでは決してない。でも変ななって思うところが。ただ笑いに行かせているわけではない。
質問24(追質問)	男性メンバーを入れる構想はあると思いますか
	作品に必要ななら入れてもいいんじゃないかなとか、この人とやってみようというのが振付家の中であれば可能性はゼロではないと思います。
質問25(追質問)	女性だけでやっていこうというわけではない？心境の変化があれば
	心境の変化があればですね。いまは聞いてないです。
質問26(追質問)	女性だけのカンパニーだと、(男女はいるだけでストーリーが生まれてしまうという言葉もあったけど、)ある種のストーリーのなさを追求しているという感じですか。
	追及というか。私が出演したシーンの中でシャワーを浴びるというシーンがあってすごくシーンとして演劇的は要素のあるものがある、そういうシーンは作品のメリハリとかバランスとしてあるのだと思いますが、男女の愛を投影してますとかではないだろうな。 男性であることが必要なシーンがあればきつといるんじゃないかな。
質問27(追質問)	動きを追及するという、動きを見たらストーリーよりもですか？
	ストーリーというか、その瞬間的な感情とか。「驚いた」とか「悔しかった」とか「切ないね」とかをストーリーじゃない何かで見せたいののかなと。シンプルな感情でなく「世知辛いね」とか「憎らしいけど可愛い」とか、そういうもやっとしたものをやりたいののかなと思ったことはあります。
質問28(追質問)	ストーリーを見て感じるということではなく、気持ちそのものを動きで表現して、そのもやっとした気持ちを観客に与えるという感じかな
	そうですね。観た印象できつとそうなんだろうなと思います。
質問29(追質問)	賞を取ったことがターニングポイントとして思っよるしいですか。
	そうですね。一つはあると思います。 自分たちも自覚しますよね。しかもトヨタの場合は、「次代を担う振付家」という賞の名前だったりますので。 明らかにその時最終選考まで残ったメンバーの中で、プロジェクト大山が賞を取ったということは、「あーなんかこういう期待なんだろうな」というのを感じ易い選考内容だったというのがある。カンパニーとしてちゃんと作品を創る、新しいとまでは、王道なテクニックとかもあるといえはありますが、ちゃんと創れる人を育てたいだろうな、と個人的には感じました。
質問30(追質問)	古家さんを支えたいという気持ちが自然に湧いてくるということですか。振付の魅力があるからそれに惹きつけられてそうしたいということですか。
	もし自分が違う人生を歩んでいたらとしても、ダンサーでなくても、きつと古家さんの作品を観たらこの人たち面白いな応援したいと思うと思います。 客観的に。
質問31(追質問)	最後に質問したインタビュー1へ質問があればお願いします。
	なんせ、私も「会社員です」といったり、ダンサーだけで食べていこうと思っていない人生なので、ダンサーを職業としているメンバーからプロジェクト大山を見た場合ともしかしたらちょっと違うんじゃないかなというのはあります。 じゃあ、なんで自分が職業ダンサーではないのかはなかなか答えづらいところではあるのですが。 それでも応援していっしょにやっていきたいなと思っているのは今の質問の通り。普通に客観的に観て一番面白いと思っよるしいけど何かという割と強い自信があるのでそういうメンバーの中にはいるんだなと捉えてもらえれば。
質問32(追質問)	プロジェクト大山の中でダンスをするということはダンサーにとってどんなことでしょうか
	最近オーディションで参加してくれたメンバーもいるのですが。 大山の作品だけではなく演劇作品に出るにあたりスケジュールがあうメンバーが揃わなかったということもあって、新たな試みとしてオーディションをやってみたのですが、あとはワークショップで地方で子どもに教えるとか地方のダンサーと一緒にクリエーションするとかあるんですが。 ダンスをやっている人にとっても難しいんじゃないかなと、身体の使い方とか、ニュアンスと呼んでいるものが、決まりきったところへ持って行くのは訓練した人の方が割と出来ると思うのですが、そうでなくあえて外すとかは訓練ばりばりしなかった人の方が難しいし、融通がきかないのかな。 ダンス全然やってない人の方がニュアンスは掴める。 でもテクニク的には難しいことだったりするので、演劇だけをやってる人にはなかなか時間かかるだろうな。本当に演劇をやっている役者さんに古家が振付をする機会もあったのですが、「やっぱり難しいねこういうのって」というので、間の取り方とかリズムの割り方とかそういう意味ではダンス的なものがすごく多いのですが、いろんな要素があって、ダンサーにとってはこういう動きもあるんだねと新発見とかが多少はあるのではないかと。

質問33(追質問)
プロジェクト大山で踊ることがダンサーとしての自分に与える影響は何ですか。
一つは、ほんとうにゼロから創る。全くないところからシーンを創るといって過程を通すと表現ってなんだろうっていう根本的なことは思いますよね。これはやりすぎなんだとか、これは足りないのだとかの加減も。
振付をこういうシーンでこういう動きをやってと言われたときにもっとこうしてと言われたりそこはそうじゃなくてこっちでと言われると、ああそっかそういうことかと思うこともあるので、本当に動きで表現するってなんだろうって。
学習っていうのも本当は違うのですが、あ！だったらこっちの方がいいかなとか、このチームと合わせなきゃだめだよとかがなんとなく演出として理解できると理解できる。理解できないと頭に入っていないというのがあるので、割と意図を理解するとずっとその構成、変更とかがあっても、こういう意図で変更したからこのタイミングでやることになったんだねって。ぱっと入るんですね。
理解というのは言葉として難しいのですが、そうそう腑に落ちる。
腑に落ちるとすっとくるけど腑に落ちないとすっと来ないことをひたすらやっている作品ですね。
ある程度シーンが出来てきて、じゃあ誰がどこでって音楽に合わせてやってみようというときに、腑に落ちてるとこうだよって一回やっておっけいをもらえるし、それが分かってないとか何回もリハーサル繰り返すことになっちゃったりして、あれ？どこ引かかかってるんだらうなって。知らなかったか〜って。
質問34(追質問)
自分の認識と身体が一致してないところがある程度難しいわけですね。
それはあるかもしれませんが、テクニク的に出来るかどうかは置いてなんですけど、練習しないし出来ないこととかも結構あるの。
あと、メンバーでみんなで一緒に動きをやった時に、誰のあれが良かったからみんなあの人が習ってっていう指示があるんですね。それってやっぱり自分ひとり踊ってると気付かなくて、メンバーが居て振付家が居て全体のバランスを見て、このシーンはこういうテイストがいいとか、この人がやったこの動きが良かったとか見えてくる。それはやっぱりカンパニーで振付家がいて踊っていることの醍醐味。
たぶん、自分がダンサーかつ振付家で、他の人に振りを付けるときには、自分がダンサーに入っちゃうと自分がいいと思っちゃうと思うんですね。
振付家が客観的に観て、振付家が必要なこととして「このダンサーのあの動きを全体でやるべきだ」なのか、「このダンサーのあの動きがこうだから、この人は違う動きをした方がいい」とかが見えてくると思う。それはカンパニーで踊っていることの面白いことだなと。
質問35(追質問)
ダンスを通したグループワークとか、腑に落ちるって大事なことだと分かりました。グループとして生成していく過程を振付を通してやってののかなと思いました。
そうですね。一人じゃ出来ないことって、振付家がいてメンバーがいて出来るってなっていることは感じますね。
たぶん、特にプロジェクト大山だと、バレエだったらここまでの角度で手を挙げて、ここまで足を上がると美しいとかだと思うんですけど。
自分が美しいと思っているものがそのシーンでの正解かどうかは分からないというのが面白いことだなと思っていて、前後のシーンがこうだったからこのシーンはこういう風にしようという決まり方もあるの。
質問36(追質問)
バレエの場合は型とか流れとかありますよね。
身体的なものはこれがいいというのがあるって、その中で、感情表現とか音楽性とかいわれているところでダンサーが個性を出していくと思うんですけど、その型そのものが、プロジェクト大山の振付の場合は、正解を見つけるまで結構遠いぞというのがある。
質問37(追質問)
正解はあるのですか？
最終的に作品としてこうだったねとか、一本上演してみても振り返った時でこのシーンはこれが足りなかったねとか。そういうのを見つけていくというのは、再演出出来るとそういうのを直そうと思ったりして。コンテンツラリーの作品は再演出していくことで上製されていくこともあるなと。それをクリエイションしているのが振付家の人なので。
質問38(追質問)
計画的な正解はないけど、そこに円周率のように近づいていくような感じですかね。
その時参加するメンバーで内容が変わっていくこともあるので。古典では出会えない良さもあるのかなって。
質問39(追質問)
では最後に一言。
そうですね。グループワークと言われるとそんな大したことやってないなというのが正直なところで。学生の頃から長くやっているメンバーがいるのが大きくて、大学ダンスについて語るつもりはないのですが、そうやって頑張っている若いカンパニーも最近はいっているかな。学校で知り合っちゃんとカンパニーとして頑張ろうと意思を見ている人たち。(プロジェクト大山以外にも)それはダンスという文化が上製していくのに悪いことではないなと。

7. インタビュー調査 (ダンサー B)

質問1
古家の下で踊ろうとなった経緯
振付家は、2学年上の先輩で学生時代のつながりとしてはモダンダンス部の先輩と後輩の立ち位置。学生時代は彼女の作品に出ることは一回もなく、変わった先輩だなという印象を思っていました。自分が学生の頃から大山は活動していてそれを見に行っていました。
なぜ、大山がトヨタに残った時に呼ばれたのかは不明なのですが、お声がけ頂いてその時ちょうど、同学年のまりえとさやかのか3人がお声がけを頂いて、3人とも一緒に参加させて頂くことになりました。それがゆり先輩の作品に出るのは初めてでした。
質問2
ご自身がカンパニーに入団したと思う時期を想像して、それまで抱いていたコレオグラファーへの印象の違いはありますか？
私は端から見てどうか、先輩として振付家を見ていたというよりは作品を見ていたという形ですが、変わった人なんだろうな、変態なんだろうなとは思ってたんですけど、でも、頭のいいしっかりした人なんだろうなと思って、作品を見ていました。作品を見てそう思っていました。
一番は構成を立てる時にすごく計算してるとあって、振付とかは独特だし発想も独特だし普通に。
面白くて変な人なんだろうなっていうのはあったんですけど、でもすごく賢い人なんだろうなっていう風に思っていました。人の動きとか流れとかを計算してるとなんだろうなというのが一番印象的だったな〜と思っていました。
実際は、あ、実際もやっぱりすごく計算してるとなんだろうなっていうのはあったんですけど。
でも基本ぱやとしてる人なので、作品の根本の部分はずっと色々考えて計算してるとなんだろうなっていうのはあったけど、少なからず周りの先輩たち同学年の人たちのサポートだいたい効いてるとなんだろうなっていうのは参加しててすごく思った。
でも結局先輩たちが振付家の思うところのベースを考えて作品を作っているの、たまに振付家がオールオッケーで受け入れる時もあるけど。
基本的に振付家が興味して、計算の中で作品を作っているんだらうなというのがあって。少なくとも作品のことをすごく考えて作品を作っているのだということは感じます。
でも普段の私生活が結構ぱやとしてるから、ダンスの時はスイッチが違うんだらうなと思って見ています。思いついたことはやってみたくて。
タイプでそれを最後計算できちっと作品を作れるから賢いと思います。

<p>質問3 入団したときから今まで切れずにカンパニーにいることを後押しした理由はありますか？</p> <p>単純に居心地がいいというのはあって、もちろん後輩なので、後輩としては先輩という人たちと私たちと下の後輩と、大学女子大の縦系列の中で大山というカンパニーがあるのですが、それでもなんというんですかね、居心地がいい。最初入ったばかりの時は何も言えなかったのですが、後輩なので。作品についても、大山の活動についても私たちは口出しするのではなくてダンサーとしてあるっていう立場で最初はいました。</p> <p>でもここ数年は関わりが変ってきて、大山は全員が大山の活動に参加している。普通のカンパニーって、振付家がいる、ダンサーがいる、制作の方がいて、それぞれの役割をもった人たちがいる。</p> <p>大山はボスという振付家がいるところに、みんなが参謀で、いろんな助言やサポートをしながら、それをボスが聞いて決定権をもつ人。制作も大山の活動について決定権はボスにあるけど、みんながそれぞれ色んな考えをもって、色んなところにアプローチをかけて。もちろん外部からの依頼もあるけれど。大山の今後をどうしてこうという話をできる環境は私にとって居心地がいい。</p> <p>ある意味フラットな関係でカンパニーメンバーがいられてるんだろな。</p> <p>中でも色んな役割があって、適材適所というか。それでもホワッと大山というグループ自体がまとまっているということが居心地がいいのだろうな。</p> <p>きちっと言える人もいるし、それでいいなと思います。</p>
<p>質問4 コレオグラファー古家のクリエーションの中で、特に興味深かったことや思い出に残っていることはありますか？</p> <p>結構、作品のコンセプトについて話してもらってに公演のぎりぎりなんですけど、タイトルが先にあって、ゆり先輩が思い描いていることや作品についての色んなことが分かるのが公演の2週間前とかにきて、私もわざわざ聞くってことはないんですけど、それが面白いんですね。</p> <p>何が面白って、じゃあクリエーション始めようってなってゆり先輩が作品を作る時って大体イメージの音があって、そこにたぶん何も考えてきてないけど、こういうものがやりたいていというあえずの雰囲気が入ってきて、周りのダンサーがここでこういう感じにしたいんだってっていう、こういうのどうって言うのが合わさって行って、そこから組んでいくという作業がある。</p> <p>他のカンパニーの人たちと比べてというよりは、すごく作品にとりかかるといって、おおまかなところから作品を作ることが始まっている。</p> <p>タイトルとかコンセプトとかに頼りたくなって、単純に動きの見た目として面白いものを追求できる、余裕ではないけど、そういうところに重点を置いているのがよくわかる。コンセプトによりすぎると演出とかに偏るところがあるけど、というよりはまず動き。見て面白いていいうのがあるんだろなと思う。</p> <p>あとは、音楽でたけちゃんがついてくれるけど、音にもすごくこだわるから、作品を演出で魅せるというよりは作品をビジュアル的に、視覚的に聴覚的に魅せるということに長けているんだろな。もちろんコンセプトを伝えることも元々あるし、それに乗った演出もするんだけど、視覚的な魅せるという動きとか衣装も音楽も魅せるということがゆり先輩がいいと思ってるんだろな。</p> <p>なんていったらいいんだろな、難しい。演出はいつも後についてくる。構成や小道具とかも。体の動きを魅せるのが重要なところにある。</p> <p>ゆり先輩ってしゃべるのがあまり得意じゃないから、言葉に言わなくてたまに絵とか書いて見せたりしますよね。言語というよりは視覚的な何かかイメージとして元々持っているんだろなと思います。</p>
<p>質問5 大山のスタイルについて、女性のみのカンパニーに対して。</p> <p>衣装の千代ちゃんも、音楽のたけちゃんも、大山の作品をずっとやってきていて、振付家のことをよくわかっていて大山のこともわかっていて、大山を好きでいてくれる人たちがスタッフとしていてくれるのはすごく大きい。すごくラッキーなことだと思えます。</p> <p>音楽も衣装も最高だと思います(笑)大山になくはない一要素になっている。</p> <p>衣装も振付家が千代ちゃんと一緒に相談しながらやっていると思うけど、それを形に出来るセンスがすごい。</p> <p>音楽も色々あーだこーだいっているけど、基本的にはたけちゃんの持つ音に乗る。基本的にこういう感じにしてほしいとは伝えてはいるんですけど、うまく融合させる力を音楽家を持っている。すごいなと思います。</p> <p>世の中にはいろんな面白いものを作っている方がいるから(すそさんももちろんそうだし、コラボレーションも面白いとおもうけど、大山の根底のところには二人の力が多大に影響している。</p> <p>大山のユニホームというべき青い衣装とか。青＝大山というぐらいの印象を与えられるってすごいですね。一番最初にあの衣装だったからインパクトだったとおもうけど、一回大野一雄ダンスフェスティバルでやったピンクの衣装は、あれは規制品だけど、帽子は千代ちゃんですね。あれがすごい印象的。</p> <p>(トヨタが本格的に千代ちゃんデビュー、2009年のカズフェスで頭だけ依頼してからですね)それが、良かったね！って。印象的だったから。</p> <p>大山はそれ以降被り物というか、特徴として、ユニフォームの意味合いとしてもキャッチーですね。お客さんにとっては、もしかしてそれが一個もなかったら、あれ？着ないんだ～、ちょっと寂しいかなもかもしれないし。衣装も音楽もすごくキャッチーだなとおもう。ゆり先輩の振付に関しても。</p>
<p>質問6 女性のみのカンパニーに対してはどう思われますか。</p> <p>私は、同期の組んでいるコロンチも女性のみの集団なのですが、ただ、普通の女の子の集団というよりは、もっとさっぱりした関係なんだろうなっておもうんで。別のそんな、影でこそそこが無い。言いたかったらいうし。唯一コロンチと違うのは、同期と先輩・後輩でなりたっているところがあるし、そこも先輩たちは気を使わなくていいフラットな関係でいてくれるし、居心地がいいなと思います。</p> <p>ただ、個人的に別の主催の公演に出ている、先輩が見にくる時は、やばいどうしよう(緊張する)っとはなりません。</p> <p>ライブで男の人と踊る機会が少なくて、つい最近参加する機会があって、男の人と女の人って観点が違うとおもう事がある。</p> <p>作品のことでなく普段会話して、なんでそんな風に考えるんだろって。思考の派生する方向が違うんだろなって思った。その時は演劇の人もいたからかもしれないけど、それは面白くなって思った。</p> <p>大山もコロンチも女だけの集団で、やっぱり女性性とか女っていうことが作品の大前提としてあるというのと思う。</p> <p>大山もどくに母性とか女性性とか、動きにしても作品のコンセプトとしても女という部分が強く押し出されているというか現れるんだろなって。</p> <p>男の人にとっても興味深い部分だと思う。そこから男の人と女の人の大山を見て印象って違うんだろなって。</p> <p>別に私が大山にいて、男性的目線をもって参加しようという気もないし、観客は老若男女いて、その色んな視点を考えて作品を作る必要はないから、大山の持っている女性という視点を大事にしているという点では明快で、いいなって思うし、あとは女性だけで集まると恋愛の話とかが始まるのはすごく楽しい。それって男の人がいる環境とは絶対違うし、もちろん子供ができたとか結婚するとか、彼氏が出来た別れたとかそういう話って、女の人、「女子」という中で生まれるものが少なからず作品には影響するし、男の人は違う観点や女だけだから生まれる部分はあるんじゃないかと思う。</p> <p>大山に男の人がいたらどうだろうっていうのは想像する。男の人が入ったらどうなんだろって。リフトとかしちゃうのかなって！</p> <p>男の人が大山の動きをするっていうのは興味深い。何に見えるんだろって。大山って土偶っぽいじゃないですか、衣装もそうだけど。土偶ってほせいだよ、女の人の象徴だから。動きの丸い感じの印象もだと思えますけど。</p>
<p>質問7 すごく長い期間活動しているとおもうのですが、具体的に印象に残っている一場面というかエピソードはありますか？リハの中でも、二人のやり取りの中でも。</p> <p>印象に残っているというか、いつも思うのが、ゆり先輩がわ～っと(焦って)なっているときに、周りの先輩はまっておくんだなっていうことですね。やれば出来る子なのよっていう。みんな分かってやれているのが面白いな、って。言うだけ言うんだけど、最終的にはゆり先輩をほっておく、それってすごい信頼関係だなと思う。</p> <p>でももっと厳しくしてもいいだろうなと個人的には思っている。お尻を叩けばもっと出来る人だって思う。でもみんな優しいから、最後まで面倒みてあとはほいてくれるっていうのが現状ですね。</p> <p>面白い関係性だなと思います。私自身は、カンパニーの、大山の中ではいわゆるダンサー班みたいななくくりでいさせて頂いているんですけど、下手なことと色んなことさせられるから(笑)例えば、性教育の先生とか、面白いんですけどね。自分が大山の中でどう立ち位置でいたいという色んな経験はしたいのですが、ちゃんとダンスを踊れる人でいたいな、(ほかのダンサーやお客さんに)渡してきましていえるスタンスでいたい。</p> <p>単純に大山で踊っているのは楽しいので。お金にならないとしても。</p> <p>みんな働きながらやっているから、私も自由に働いていますけど、みなさん月曜日～金曜日で働いて、稽古に来て有給とって本番迎えて、それでも踊りたいと思えるカンパニーがあるっていうのはすごいですよ。</p> <p>それはゆり先輩のカリスマ性？(笑)もちろん人柄もあるし、作品の力もある。私は大山面白く思っているから色んな人に観て頂きたいと思っているので。活動の範囲広げて地方とか、うまくやっていたらいいなって本当に思う。こんな面白いのに、なんでみんな観てないのっておもしろい。</p> <p>もったいないなって思うんですけどね。みんなももっと観たいのにならなくてメンバーの私がいうのもなんですけど。でもみんな大山の作品が好きだから参加しているんだと思う。</p> <p>かわいいですよ、ゆり先輩って。愛らしいですよ。ほっとけない、チャームキングである。</p>

質問8
<p>大山で踊ることと他の活動と比べ、ダンサーとしての取組みに違いはありますか</p> <p>大山の動きって振付家に起因しているから、すごく踊りにくいんですよ。踊りにくいというかそんなポーズ出来ませんとかそれどうやってやってるんですかみたいなことが多々あって。</p> <p>それはシーンとして他のメンバーから出てる時もそれはその人だから出来るんですよってことって色々ある。</p> <p>だから、振付に関しては与えられたものを受け取っている。与えられたものをなるべく忠実に出来るようにダンサーとして動いている。</p> <p>他の振付家の方がいましてそこに参加するときは、もう少し自分から発生させて、振付に反映させる部分があって。ワークして振付家が見ながら何かそこからピックアップして振付を考えると。こういう感じをやってみてと言われたものをやってみたくて、じゃあそういう感じと。</p> <p>言葉が違うかもしれないけど、私が何か与えて、振付をもらうという関係性がある。それって、私自身から生まれるものを返してもらっている。</p> <p>振付家のコンセプトに沿うように、抽出されたものをうまく融合させて動きができていう過程がある場合が多い。</p> <p>でも大山は、ゆり先輩のイメージ。ゆり先輩の動きのテイストというのをどうにか私のものにしよう。どうしたらゆり先輩みたいなフォルムになるのだろうと思いついてる。</p> <p>しかしそれがうまくいなくて、うまくいかないというか大山って色んな人がいて、同じ動きをしてははずなのにどうも一緒にならない。そこから滲み出る個性みたいな。同じものを目指してるのに違うものが出てくることって、もっともっと絞り出された個性みたいな。最小限に潰されてつぶされてそこからジワって出てくる個性が、大山のダンサーの動きのあり方。</p> <p>他のダンサーがどう思ってるかは分からないのだけど、でも少なくとも同じ振付をやっているのに全然違うというのは、みんなが近づこうとしてぎゅーっと凝縮されたところからこぼれ落ちる個性って結構濃い個性が出るから面白いんだろうなって。</p> <p>それ以外のシーンで個性を際立たせるシーンが大山にはあって、このシーンはこの人というのがあるというのはカンパニーだけでなくダンサーが立つ。たとえば、長谷川風立って大山であれやっていた人ですよ。三浦舞子って牛やっていた人、加藤未来はミス牛乳ね、っていうダンサーを立てるシーンがあるのは面白いというか、わかりやすいというか、やり甲斐があるかな。それって観てる側にもキャッチーだし、ダンサーとしてもありがたい。見合ったシーンが与えられているということは、大山っていうカンパニーだけでなくダンサー個人がたつし、作品を作っていて面白い部分だなと思っています。</p> <p>私は人魚がやりたかった(笑)</p>
質問9
<p>大山ダンサーとしてのターニングポイントはどこですか</p> <p>「キャッチマイビーム」の時はわけわからずやっていた。初めての作品ですし、結構ベースができていたので、創作というクリエイションの過程をあまり踏まずに振り回らされてやるっていう立ち位置で。そこまでがっつり踏み込みという感じではなかった。受賞者公演をするときに…そのときもあんまり何も考えて無かったからな。</p> <p>というかつら自分が正規メンバーになっていたのか分からない。あれ次の公演も呼ばれるな、ぐらいの。あなたは今日から大山メンバーですって言われることもなかったの、次も呼んでもらえるラッキーぐらいのスタンスでしたよね。</p> <p>ターニングポイント…。あ。話がずれるかもしれないのですが、みんな仕事もしているから、稽古に出来ないで作品が進むと出番がなくなるんですよ。その場にいない人で構成ができていくから。今はそんなことはないんですけど、キャッチのときは特に稽古にいないと出番がなくなるっていうのがすごく怖くて。構成組んでるときに稽古にいないと自分が出てないっていうのあった。もっとちゃんとダンサーやりたいておもうって仕事辞めたきつかけになったのは確か。</p> <p>私はもともと月～金で働いていて、9時～18時で仕事して、残業があると稽古にできないとか。踊りたいのに。ダンサーとしてのスタンスは、会社に入るときから決めていたの、もっと大山でダンサーやりたいし、地方もいきたいし、でも仕事があつて出れないのが悔しいと思ったときに、じゃあダンサーをちゃんとやろうって思ったきつかけだった。大山で踊れるなら、もっとダンサーとして確立したいと思っています。おかげで仕事を辞めました。</p> <p>仕事を辞めたのは、2012年2月、ガラスの動物園の稽古はじまり前かな。</p>
質問10(追質問)
<p>質問9の回答から、大山のダンスカンパニーに対してのダンサーとしてのアイデンティティはないということですか。</p> <p>最初のトヨタのアワードで呼ばれた時は、その時の助っ人要因だと思っていた。受賞して、受賞作品は作品のメンバーとして出るんだろうなと。</p> <p>でも、大山のメンバーだから今後の予定も聞いていくよっていうスタンスではなくて、いついつに公演があるから出れる？という聞かれ方、大山がみんな仕事でその時に出来る人がまちまちでその都度聞いていく形。ああまた呼んでくれるんだ、そこでいいんだというつもりで参加していました。</p> <p>メンバーではなく助っ人と思っていた。</p> <p>(プロジェクト公演みたいなものかな?)そうですね。</p>
質問11(追質問)
<p>普通のカンパニーには役割があるのですか</p> <p>普通はオーディションをして、カンパニーダンサーを募ってそこからピックアップしてこれから団員ですとなります。それではなかったですし、なんで呼ばれたのも分かんないです。もともと先輩たちがやっていたグループなので、後輩もそこには数名入っていたのですが、そんなに関わりも無かったのになぜ私って。</p> <p>(いつ頃からカンパニーダンサーと意識したのですか?今も助っ人感はないの?)つい半年前ほどにみわあき先輩から今日からメンバーですと言われた。言われたことないって話をしたら、その場で言ってもらったんです。もちろん作品にいろいろ関わらせて頂く中で、自分も関わっているなどという意識はあったので、そこに対してアンテナが全くないかというそんなことはなくて、徐々にですね。(日本の首の集団に近い)</p> <p>(今は助っ人要因意識はないのですか?)はい、そうですね。</p>
質問12(追質問)
<p>オーソドックスなダンスの作り方というのはコレオグラフがあってそれをなぞっていくのですか?</p> <p>それは作者の人によると思います。一概にそうとは言えない。ゆり先輩のやり方が特徴的かと聞かれるとそうではないかもしれない。</p> <p>(古家さんの動きがコレオグラフの手本となる?)はい、そうですね。ゆり先輩ですよ、大山は。でもここにこういうのが欲しいという時に他のメンバーからでもものもあるの、それは作品の一つのシーンになる。</p> <p>(古家さんの動きの型、型といっているのかな、をなぞるのですか?古家さんが型になっているのかな)大山の動きの特徴として、鎌足とか肩が上がるとか、お尻がぶりと出るとか、大山っぽい動きというのはあると思います。それってゆり先輩の動きに近い。</p> <p>(例えば、バタとすこい違うね、あそこはワンマンで動かしていく、大山のキャラたちというのはいくつもある。他のダンスってそこは潰していくイメージで、一緒に動く時はキャラ立ちしないがするの大山らしい)そこもカンパニーによると思うのですが、大山はオーディションで取っているわけではないから、結局、オーディションはどこを見てもかにもよるけど作者の思っているものにハマる人を取るじゃないですか、でもそういうわけではなく、ゆり先輩としてのこだわりはお戻ぐらいい、その人がすごく何かができるかというところを見ている訳ではないかなと。愉快な人たちの集まりだとは思いますが、ゆり先輩が思ってたピックアップして選んでいるというよりは、寄せ集めたものをゆり先輩がうまく使っていると思う。</p>
質問13(追質問)
<p>ダンスが踊れる人という話でしたが、このスタンスはダンス要因として助っ人として入った感覚の時ですか。</p> <p>大山のメンバーは色んな人がいて、少なくとも私は踊れる人ではない。カンパニーメンバーとして、身体能力として踊れる方だと思っています。</p> <p>自分がそう思っていることなので、大山が面白いキャラクター集団ではなくダンスができるという大前提があるべきだと思うんです。魅せるという意味で、面白い動きができるというのは個性、でもそれだけではなく、テクニクというか、ダンスが上手ということではなくて。魅せられるダンサー。キャラクターでカバーするのではなくダンサーとして魅せられるポジションでいい。</p>
質問14(追質問)
<p>プロジェクト大山で踊るのは楽しいという言葉が出ましたが、具体的に何が楽しいのですか。</p> <p>ハラハラする感じですかね。大山は居心地がいいので楽しいのですが、踊るのが何が楽しいかというお客さんの反応ですね。</p> <p>私は作品が出来ていって、これ本当に大丈夫かなとか結構あるんですよ。失敗というか、お笑いというさすべみたいな心配をするというお客さんにとっての迎撃まで共同範囲で受け入れてもらえるのかなと思うんですが。</p> <p>それは思い過ごしというか、ゆり先輩がどこまで計算しているかわからないのですが、当日お客さんの反応はいいんですよ。</p> <p>もちろん、賛否両論あるんですけどね。色んな感想ももらいますが、それでもお客さんの反応はいい。そこが私との差異や違和感ではなく単純に面白い。</p> <p>いつもぎりぎりまで本番が来るので、果たしてこの作品は評価の前はどうなっているんだろうというハラハラ感があるんです。でもそれって自分の力量を試されているわけではないのですが、メンバーとしては初日があけて作品が成長するというのはあるけど、初日のお客さんに失礼。</p> <p>同じお金払っているの、最低限のことが出来て初日のお客さんに見せなくてはいけないというのがあるんですが、それでも初日開けた時に「わ!大丈夫だ」という驚きがある。これはなんでしょうね。</p> <p>大山というグループがもともと持っている力があるから、お客さんに受け入れられて、それで自分は安心して踊れるのかな。</p> <p>決して稽古日程が少ないとか、制作時間が少ないとかではなく、もし長くてもきつぎりまであーだこーだやっていると思うんです。でも幕が開けたときに大丈夫だって思えるのは大山の作品が持つ力かなんかだ。そういうところにいられるって幸せなことだと思います。</p>

<p>質問15(追質問) 古家さんの女性にとっての魅力の大きさをすごいですね。 魅力的な人だと思います。絶対古家ゆうりにはなれないということですね。尊敬っていうと大事過ぎて違うんですけど。憧れですかね。 もちろん、コレオグラファーとしての才能はすごくあると思うんです。人を惹きつけるところ。 プライベートでも可愛いですよ。愛らしい、不思議な人だなんて思う。考えていることとか発言も、コレオグラファーとしてはまた別の人間的なところですね。本人はすごく苦勞するタイプですけれどね。なぜか大体許せてしまいます。</p>
<p>質問16(追質問) 妊婦ダンスを見た時はびっくりしたのですが、大山の女性としての視点とはどこですか 被り物をする時から、女性性ということがあって、ゆうり先輩がとて女子なんだと思います。男の人は持ってない母性とか、産むということに対してすごく(意識が)ある。 多分、ゆうり先輩は一人でいられない人で誰かと常に関わっていたい人だと思うんですけど。いわゆるどろどろした女子の関係ではなく腹を割った女子って拳で分かち合った男同士の友情みたいにごい深い。もともと持っている女っていう認識って無意識のうちにつながっているものがあり、考え方が違っても無意識のうちにこの人とは関わりあえるというのをゆうり先輩は察しているんだらうなと思う。大山の作品を見ていると、みんなに甘えているんだらうなというのがある。メンバーに対してゆうり先輩が、それって心を許しているからできること。怒られるってわかってはいるけどできる。怒ってもらえるからできるというスタンスがあるんだらうな。どう作品に生きるかという 別に女性的なノリで作っているわけではないけれど、共通の認識として女として生きてきて結婚して出産するという部分はどんな女性のグループでもそこらからあると思うのですが、母性や女としての意識はゆうり先輩がすごく強いから、私はさっぱりしているの、ああそうたよなって共感しながらわかっていく部分がある。作品のコンセプトやタイトルを考えているのはゆうり先輩なので、そういうところに女の部分がすぐ出てくると思います。</p>
<p>質問17(追質問) 女性としての、産む性とか、身体の土着的な部分での繋がりをを感じる。男では到達できない繋がり方。男は利害関係とかでつながるけど、女性はそれを一切乗り越えて、女性であるがゆえに繋がれるものがすごくあるんだと話して聞いていて分かりました。政治的なフェミニズムではなく、ダンス的なフェミニズムの結晶ですね。 子供を産んで、今後更に変わっていくんだらうなと思います。</p>
<p>質問18(追質問) 男性ダンサーはいない方がいいかな。 大山としては女性のみでやるのがいいと思う。企画ものとしてはってもいいけど。(僕はファンとして、男性は入れない方がいいと思います。個人的に)</p>
<p>質問19(追質問) 作品のコンセプトは大事なのですか ゆうり先輩が作品を作るときにおおまかなものがあると思いますが、お客さんに見せる作品ノートにまとめる段階で作品を作っていく中で固めているんだらうなと思います。おおまかなコンセプトがアルンだと思います。 コンセプト自体をはっきり直接聞くという機会はなくて、ある日突然知らされます。</p>
<p>質問20(追質問) 作品が出来上がって終り頃にコンセプトを知らされるというのは普通のことではないのですか それも作者によると思うんですけどね。でも大山も最初からタイトルは決まっているので、その時点でおおまかなものは先輩の中であると思います。 構成立てている時にこうしたいシーンが欲しいという具体的なものはあるので、私たちも少なからず色々な情報の中でこういう作品を作りたいのだからうなという理解はある。作品ノートとして抽出された言葉は直前。</p>
<p>質問21(追質問) プロジェクト大山に対する葛藤はダンサーとしては無いの 稽古にいて、何もしないというのはダンサーとしては辛い。作品で悩みがあり進まない時は、どの作家の人もそうだけど、なんでも試したい人や考えたい人があって、それが稽古のタイミングとまくつじつまが合わないというのはもしかしらあるかもしれない。結構何も無い日が続くとどうするのかなーというのはある。あるシーンを練習しながら、先輩に思考が降りてくるのを待つ。</p>

8. プロジェクト大山におけるカンパニーの形成

全体を通してのダンサーAとダンサーBの共通項は、振付家古家を中心としながらも其々が動きあっていくことを通して生成されるというカンパニーの在り方への認識である。演出や振付といった作品の創作に関しても、広報や制作部分でのチームワークに関してもお互いが自ら意見を出し合い、実際に行動し、更に両者の関係性が変化し続けている。作品の軸を成す「女性」というテーマを、自らの等身大として受け止めている点もカンパニーが継続されている理由の一つであると考えることができる。年齢を重ね、結婚や出産という生活環境や社会的立場の変化がダンスと分離せず溶け合って作品化される。また稽古のスタイルも同時に変化している。ダンスが非現実的な表象の世界を現すアートとしてだけでなく、日常の変化による身体の感覚変化を取り込むことが自然に起きるカンパニーであることもメンバーの言葉から読み取れた。ダンスを続けることが、カンパニーに所属することと日常の生活の変化と分離していない。

また、プロジェクト大山のカンパニー構成の特徴は、振付家に寄り添った思考がメンバーから自然に発生するところにある。振付家としての実力やセンスを客観的にメンバーが認めている。

また衣装や音楽のスタッフが立ち上げ期から変わらず継続してチームの一員であることが、メンバー各人の安心感と自信に繋がっている。特にターニングポイントといえる2010年のトヨタコレオグラフィアワードでの受賞後には、周りの評価が振付家のみでなくメ

ンバーの意識も変え、カンパニーへの責任感が個々のレベルで生まれている。このことで、カンパニーの特徴や見せたい世界観をメンバー各々が各人の言葉で発言できている。

振付については振付家の趣向の比重が高く、それに応える形でメンバーは取り組んでいるということについてダンサーBは以下のように語った。「少なくとも同じ振付をやっているのに全然違うというのは、みんなが近づこうとしてぎゅーっと凝縮されたところからこぼれ落ちる個性って結構濃い個性が出るから面白いんだろうな」。ダンサーBが「見合ったシーンが与えられているということは、大山っていうカンパニーだけでなくダンサー個人がたつし、作品を作っていて面白い部分」と述べるように、メンバー各人が自分のカンパニー作品におけるキャラクターや役所を理解していて、売りはここであると認識している。更に稽古の進行や振付家との関係性に関しても其々が立場を冷静に分析できていると読み取れた。

更に、自身がメンバーであるということへの主観的な判断ではなく客観的にカンパニーが面白いと感じており、より活動の幅が広がり普及していけるカンパニーであるという信念を持っている。自身が出演しているかいないかに関わらず、カンパニーが沢山の人の目に届く存在になるように期待している発言がみられた。

9. おわりに

ダンスカンパニーのあり方を軸としたコンテンポラリーダンスの考え方に関して、プロジェクト大山の考察を試みた事から以下の気づきがあった。ゆるやかな繋がりで継続されるカンパニーの形成により、ダンス以外での精神面の成長や考え方の変化がカンパニーの形成に大きく関わるということである。コンテンポラリーダンスが社会性や現代の感覚をいち早く取り入れながら、身体を提示するものであるからこそ、こうした心情の変化が作風へもカンパニーの形成にも関与するのではないだろうか。同時代のいま、ここにある感覚をどのようにダンスに転換するかを突き詰める舞踊の、カンパニーの在り方もまた時代の変化を反映するのであろう。

また、大山の主宰者の言葉に「私共が考えるコンテンポラリーダンスの魅力は、「いま、ここで生きている身体感覚、身体の表情の豊かさである。言葉、文脈では表せない感覚を生舞台芸術であることの必然性として、説明的・理論的に訴えかけるのではなく、観客自身の感覚、感情といったものに伝わるような表現を追及していきたい。それこそがコンテンポラリーダンスでしか実現しない、観客の体験となる」とあるように、生きること自体の変化や些細な日常の瞬間を直接反映したいという欲に駆られ、ダンスが生まれる。このことをコンテンポラリーダンスとするならば、はじめに記した通り、固定概念を持たず変容し続ける形態を指すコンテンポラリーダンスは、その集団が誰を中心としているか、どのような背景を持っているのか、また資金や環境との関係によって多種多様な形態がある。偶然にも日本を土壌とし、大学という教育機関が出発点であることから、プロジェクト大山はこうしたカンパニーの生成の特徴が明るみとなった。

生き方そのものへの問いがカンパニー生成への問いに直接影響していると本論を通して分かり、さらなるカンパニー生成への考を深めたい。

参考・引用

- 1) 関典子(2014)Site Specific Dance Performance 考ーコンテンポラリーダンスにおける動向に着目してー。神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要、第8巻、第1号
- 2) アニエス・イズリーヌ著：岩下綾 松澤慶信訳 (2010) ダンスは国家と踊る フランスコンテンポラリー・ダンスの系譜。慶応義塾大学出版会、東京
- 3) 尼ヶ崎彬 (2002) 海図のない航海ー90年代のコンテンポラリー・ダンス。コンテンポラリー・ダンス・シリーズ4、愛知芸術文化センター
- 4) 尼ヶ崎彬 (2004) ダンス・クリティーク舞踊の現在/舞踊の身体。勁草書房、東京
- 5) 石井達朗 (2011) 身体が語ることのみがすべて。ダンスマガジン2011年2月号、新書館、東京：87
- 6) 市川浩 (1993) 舞踊の現象学。季刊アート・エクスプレス No.1、新書館、東京：78-83
- 7) 市川浩 (1993) 舞踊の現象学。季刊アート・エクスプレス No.1、新書館、東京：78-83
- 8) 市川雅 (1995) ダンスの20世紀、新書館、東京
- 9) 片岡康子 (1991) 舞踊学講義。大修館書店、東京
- 10) 片岡康子 (1999) 20世紀舞踊の作家と作品世界。遊戯社、東京
- 11) 金森穰、篠山紀信 (2005/10) スペシャルトーク。特別企画 Noism04 『SHIKAKU』 上映会
- 12) 神澤和夫 (1990) 20世紀の舞踊。未来社、東京
- 13) 神澤和夫 (1996) 21世紀への舞踊論。大修館書店、東京
- 14) 上林済雄 (1992) 二十世紀の舞踊史。ダンスワーク No.45、ダンスワーク舎、東京
- 15) 唐津絵里 (2000) のにおけるダンスの受容と現在。コンテンポラリー・ダンス・シリーズ、愛知芸術文化センター：28-31
- 16) 国吉和子 (2000) 新しい靴を履くとき。コンテンポラリー・ダンス・シリーズ3、愛知芸術文化センター：8-11
- 17) 西條剛央 (2007) ライブ講義・質的研究とは何か SCQRMベーシック編。新曜社
- 18) 桜井厚・小林多寿子 (2005) ライフストーリー・インタビュー質的研究入門。せりか書房、東京
- 19) 佐藤郁哉 (2008) 質的データ分析入門。新曜社、東京
- 20) 仙道弘生 (2007) パフォーミングアーツにみる日本人の文化力。水曜社、東京
- 21) 高木英樹、緒形ひとみ、真田久、坂入洋右、嵯峨寿 (2008) スポーツマンに必要な人間力とは何か。筑波大学体育学
- 22) 貫成人 (2000) 越境する身体。コンテンポラリー・ダンス・シリーズ3、愛知芸術文化センター：34-37
- 23) 貫成人 (2002) 「コンテンポラリーダンス」という概念。上演舞踊研究、vol.3、お茶の水女子大学上演舞踊研究室、東京：5
- 24) 乗越たかお (2006) コンテンポラリー・ダンス徹底ガイド HYPER。作品社、東京
- 25) 平山素子 (2004) ダンサーの視点からコンテンポラリーダンスを語る。上演舞踊研究、vol.5、お茶の水女子大学上演舞踊研究室、東京：11-15
- 26) 細川江利子 (2010) さまざまなダンスの世界。女子体育6、社団法人日本女子体育連盟、東京
- 27) 松澤慶信 (2003) われわれの時代のダンスと表現主義舞踊についての覚え書き。身体をキャプチャーする - 表現主義舞踊の系譜、慶応義塾大学アート・センター、東京

- 28) 三浦雅士 (1993) 舞踊、炎える焦点。季刊アート・エクスプレス No.1、新書館、東京：10
- 29) 三輪亜希子 (2004) 金森穰研究—作品『SHIKAKU』に始まるダンス・カンパニーの設立—。
お茶の水女子大学卒業論文
- 30) 山口順子 (1990) 舞踊史方法論の一考察～現代の舞踊。筑波大学大学院修士論文
- 31) 山下裕子 (2003) コンテンポラリー・ダンスにおけるダンサーの魅力に関する研究—新進プロダンサーを対象に—。筑波大学大学院